

おかし俺が

クマ

だった

ころ

山中與隆

YAMANAKA TOMOTAKA

らん かん
羅漢

Duo - Yamanka

むかし俺が
クマだったころ

山中與隆

目次

むかし俺がクマだつたころ

1

〔一〕

1

〔二〕

41

〔三〕

52

編者あとがき	〔八〕	〔七〕	〔六〕	〔五〕	〔四〕
			91		56
		123		60	
	189				

むかし俺がクマだったころ

作 山中與隆

〔一〕

僕は東京のある私立大学の文学部を卒業したが、就職口が見つからず、しばらくアルバイト生活をせ

ざるを得なかった。そのころは不景気が長く続いており、たいていの大卒者は就職に苦労していた。運良く職にありつけた者も、自分がそれまで勉強してきたこととは無関係な仕事に携わる場合が多かった。僕の場合は、自然保護に関する勉強をしてきたので、地方自治体のそういった部門の職を求めて、いくつかの自治体の試験を受けたがいずれも落ちたのだった。試験問題はそこそこに来たつもりだったが、

実際はできたつもりでも、できていなかったのかも
しれない。しかし、僕の思うには、僕が卒業した大
学が世間では三流と言われていることが影響してい
るように思われてしかたがない。僕自身は結構まじ
めに勉強してきたつもりだし、自分の大学を一流と
は言わないまでも、せめて二流くらいの言い方が妥
当ではないかと思っている。

とにかく、職にありつけなかったので、小さな運

送会社でアルバイトをすることにした。この会社は、普通免許で乗れる四トン車以下の車を何台も持っており、大きな運送会社の路線便の荷物を近隣の町村に配達する仕事を主にやっていた。しかし、大型も二台持っていて、ときには遠隔地まで運ぶこともあった。そういうときは、もちろん大型免許のある運転手が乗る。たいていは、どんなに遠くても一人で乗っていくのだが、特殊な荷おろし作業を依頼され

るようなときに、助手が同乗することもある。

このアルバイト中に、僕が助手をしたのは四回だったが、なぜか四回とも同じ運転手と組んだ。その人は吉田茂といい、かつての有名な総理大臣と同姓同名なことから、同僚に「大臣」と呼ばれていた。本人はこのあだ名がまんざらでもないらしく、

「大臣、××はどういう予定になってる……」
などと聞かれると、

「お答えします・・・」

と気取って返事したりすることもあつた。しかし僕は、彼のことを先輩ではあるし、「大臣」と呼び捨てにするのもなんだし、「大臣さん」というのもぱつとしないので、ちゃんと「吉田」さんと呼んでいた。

この地方の人は自分のことを「おし」という場合が多いが、吉田さんは「俺」といつていた。それでぼくははじめ吉田さんが関東地方の出身かと思つた

が、実は先祖代々この地方の出なのだそうだ。

いちど、吉田さんにどうして「わし」といわずに「俺」というのか聞いたことがあつた。吉田さんは、自分は大臣なのだからこんな地方の「わし」では格好がつかないじゃないかといい、意識的に「俺」というようにしたのだそうだ。吉田さんによると、「わし」よりも「俺」のほうが立派だといふのである。そして吉田さんは、もうひとつ「立派な」言い方を

しなくてはならない理由を話してくれた。それは、いまは吉田茂だが、以前は「羅漢」と呼ばれていたのだというのである。そのような立派な名前には「俺」という言い方が似合うというのである。

僕は吉田さんが以前「羅漢」と呼ばれていたというのが、何のことかわからなかった。相撲かプロレスラーか、あるいは合気道の先生みたいなものか、書家か。とにかく見当がつかなかった。聞いても、

簡単には説明できないといつて、教えてくれなかつた。

この会社では、めつたにないことだが四トン車で関東地方まで走る仕事が入った。僕は吉田さんと交代で運転するため、この一泊二日の仕事を命じられた。吉田さんの不思議な話を聞いたのはそのときである。

仕事は、前の日の夕方に依頼主の工場で荷物を積み込み、一度会社に戻り、翌早朝出発してその日の深夜、目的地の工場の近くまで行って、そのまま車の中で仮眠しながら、朝工場が始まるのを待つ。荷を降ろすとすぐに帰途に着くというハードなものである。大型トラックなら、運転席の後ろに足を伸ばして寝られるベッドのようなものがあるのだが、四トン車ではそのようなものはない。運転を交代して

もらっているときも、助手席で座ったままの姿勢で居眠りすることしかできない。また仮眠といつても同じである。背もたれに乗せた頭がずれ落ちて何度目も目が覚める。お互いにそんな状態であることに気づきながら、声をかけることもできない眠さで、何分かおきに頭を置き直しながら朝までの時間を過ごすのであった。それでも二人乗務ということで、優遇されていると妬む同僚もいた。このときの二人乗

務も、会社が最近ハードな運送体制で事故を起こして、当局が勤務体制に目を光らせているための対策で、この会社では、今度のようなケースは、一人乗務が当たり前であつた。会社の運転手の中では最高齢で、定年も近いという吉田さんと、大学を出たばかりのアルバイトの僕をその仕事に当てたのも、他の運転手の批判をかわず狙いもあつたのであろう。でも、そのおかげで僕は、吉田さんの「羅漢」時代

の話聞くことができたのである。

早朝の山陽自動車道を東に向かって走るトラックの中で僕が、

「吉田さんが『羅漢だったころ』といていたのは、何のことですか」

と聞いたのに答えて、吉田さんの長い話が始まった。話は仕事の合間を縫って丸二日間、ほとんど時間に

して二十時間以上にもなったのではないだろうか。
吉田さんはこんな風に話を切り出した。

『俺には、いつごろのことなのかよくわからないの
だが、とにかく『羅漢』と呼ばれていたときがあつ
たのだ。それが若いころとか、子供のころとかいう

のではなく、もつとずつと前みたいなのがするんだ。じゃあ、赤ん坊のときかというのと、そうでもない。ちやんと大人としても暮らしているのは確かなんだ。いや、大人だけでなくて、赤ん坊のときも、子供のときも、若者時代も、年寄りになつてからもひととおり一生があるみたいなんだ。自分でも夢でも見たのかと考えるのだが、それも違ふんだ。夢にしては長すぎるし、筋道が通り過ぎてゐるんだ。それに、

思い出そうとするとどの時代のことでも、見てきたことのように思い浮かべることができるとだ。まるで自分が別の人生をもうひとつ経験してきたみたいなんだよ。』

僕は、吉田さんのこの前置きを、自分の作った物語に神秘性を与えるための演出だと思って、黙って聞くことにした。

『小さいころのことで思い出すのは、怖い場面なんだ。』

そのとき俺は、どうやら母親の腹の下で寝ていたらしい。母ちゃんの体の温もりが気持ちよかったのを覚えている。母ちゃんが息をする規則的な動きがたまらなく眠気を誘うのだ。ときどき目が覚めて、

腹の下から顔を出して外を見ると、土の窪みの外側は真つ白く雪が積もっているんだ。でももつと外をよく見ようとして這い出しかけると、大きな黒い顔が近づいて、俺を腹の下に押し込むんだ。でもそのことはいやではなかった。腹の下から少しでも体が出ると、ひどい寒さで震えがきてしまうんだ。やっぱり母ちゃんの腹の下が一番快適だったのさ。』

僕はよくわからなくなつて、車の音にかき消されないように、大きな声で吉田さんに訊いた。

「それ、吉田さんの赤ちゃんのことみたいだけど、『大きな黒い顔』って、吉田さんのお母さん色の黒い人だったの」

「うん、そうだなあ。顔が黒いっていうより……うーん……でも、それが普通みたいで、変だななんて思わなかったなあ」

僕は、まるで『黒い大きな顔』などというのは、何かの動物みたいじゃないかと思つたが、だまつて先を聞くことにした。

『俺が気持ちよくうつらうつらしていると、周りでは人の声が聞こえて目が覚めた。人の声は前にも聞い

たことがあつたので、すぐにわかつたよ。そつと顔を出して覗いてみると、少し離れたところに二、三人の人が見えた。もつといたかもしれないが、母ちやんがあわてて俺を腹の下に突き戻したんだ。いつもの優しいやり方じゃなかつた。俺は何かが起きそうなんだと感じた。母ちやんが緊張しているのは、息による腹の動きが速くなつていたのでわかつた。母ちやんは、盛んに頭を動かして周りを見ているら

しい。ついに母ちゃんが小さく、しかしよく響く低い声で唸ったんだ。俺は腹の下で何も見えなかったが、母ちゃんの後ろ足が、いつでも飛び出せるように、そつと地面に爪を立てるような形に、位置を変えたのがわかった。初めてではなかったのに、危険が迫っているのだということ俺にもわかっていた。こういうときは、腹の下でじつとして、決して頭を出したりしたらだめなんだ。そんなことをしたら、

母ちゃんにひどく突かれたり、足で蹴られたりして荒っぽく腹の下に戻されるんだ。

そのときドガンと腹に響く音が谷間にこだました。とたんに母ちゃんの重みが俺の上にもろにかぶさってきた。俺は苦しくなってもがきながら腹の下から這い出したよ。母ちゃんはいつものように俺を自分の腹の下に突き戻したりはしなかつた。見ると、鼻を地面につけてじっとしている。ちよろちよると

水が流れるような音がして、母ちゃんの鼻先を伝つておびただしい血が地面に流れ出して母ちゃんの鼻を浸し、さらにその先の雪が赤く染まっけていく。母ちゃんはびくともしない。取り囲んでいた人間たちは、先ほどと同じように立っているが、みな黙ってこちらを凝視していた。やがてその中の一人が、俺たちのところに近づいて、母ちゃんの耳の辺りを鉄砲の先で突付いた。母ちゃんはそれでも動かなかつ

た。俺には何がおきたのかさっぱりわからなかつた。鉄砲で突付いた男が、何事か周りの者に合図すると、みな俺たちのところに寄ってきて、わいわい騒いでいたが、みんなして母ちゃんを窪みから引っ張り出した。そしてそのまま雪の斜面を引きずり始めた。俺は、ひとりむき出しになって、寒さと恐ろしさに震えていた。さつき鉄砲で母ちゃんを突付いた男が俺の方に手を伸ばして、捕まえようとしたんだ。俺

はわけがわからないままに、狭い窪みの中で捉まるまいと身を引いたが、男は難なく俺を抱え挙げると、胸に抱きしめた。男の胸は毛皮になっっていて、柔らかかった。でも母ちゃんの匂いはしなかった。引きずられていった母ちゃんがどうなったのかは、まったくわからない。その後いちども母ちゃんに会ったことはないんだ。

それで俺はこの男に育てられることになったんだ。この男はみんなから「元さん」て呼ばれていた。俺は元さんのところで、暖かい寢床と食べ物をもらうようになった。寢床は、土の窪みではなくて、冷たい風も雪や雨もかからないところだったね。また、食べ物といっても、生暖かくて白い飲み物で、味は母ちゃんの乳に似ていたがちよつと嫌な匂いがしていた。でもすぐに慣れておいしいと思うようになった。

た。元さんのところには、俺より少し大きいだけのちよろちよろと動き回る騒々しい生き物が三匹いて、しよつちゆう俺の周りをうろついているんだ。俺は最後まであいつらのことを好きになれなかつたな。

元さんのところには、小さい人間が三人もいて、みな俺のことが好きらしかった。元さんの子供たちさ。俺も嫌いじゃなかつたんで、よく遊んでやったものさ。子供たちは、俺に食べ物をくれるんだ。俺

が白い水だけでなく、いろいろなものを食べられるようになると、次から次とおいしいものを持ってきてくれるんだ。特に好きになつたのは、そいつらがカキとっている橙色の木の実だった。元さんの家に大きな木があつて、下から見上げると数え切れないくらいぶら下がっているんだ。

いつごろからか、元さんの子供たちがあまり俺と遊ばなくなつた。一度一番小さな子が俺にカキを持

つてきてくれたことがあつた。それを離れたところから見ていた元さんが飛んできてその子を抱きかかえて俺から遠ざけたんだ。その子はびっくりして泣き出した。俺もびっくりしたよ。子供が落とした力キは、俺の届かないところに転がってしまったね。何だか嫌われたみたいなのがして嫌だったね。そう、いい忘れていたが、俺は元さんのところに来てからまもなく首輪をつけられて、鎖で繋がれたんだ。で

も寢床は快適だし、食うものもいくらでもくれたのでそれは嫌じゃあなかつたんだ。

そのことがあつてから、俺は頑丈な鉄格子のついた檻に入れられた。そこは狭くて自由に動けないんだ。小便や糞も寢床のすぐ傍にしなきゃならんのさ。元さんが掃除をしてくれるんだが、何となくじめじめして嫌だったね。天気の良い日に、ときどきだけど元さんが散歩に連れ出してくれることがあつて、

それだけが楽しみだった。でも、間もなくそれもなくなってしまうた。どうも散歩のときに、俺が引つ張る力が強すぎるらしいんだ。俺は元さんを困らせるつもりなんか全然なくて、それどころか一緒に遊びたいと思っっているだけなんだけどね。

ある日の夕方、元さんは俺の檻の前に座り込んで長いこと話し込むんだ。元さんがぼそぼそ喋ること

は、俺にはわからなかつたが、それが何か悲しいことだということだけはわかつたよ。そして、その日はクリの実を山ほど食わせてくれた。俺はカキも好きだつたが、クリはもつとうまいと思つた。クリを食つたのはそのときが初めてではなかつたが、そんなにたくさん食わせてくれたことはなかつた。

「すまん。でもこれがお前のためなんだ」といって、元さんは泣いていたんだ。

次の朝まだ薄暗いうちに、元さんは仲間と二人で俺を檻のまま軽トラツクに乗せた。家の者たちは誰も起きていないみたいだった。それから元さんともう一人の人と檻に入った俺を乗せたトラツクは、山の道をどこまでも走った。トラツクが止まったところろは、深い森のそばで、もちろん知らないところだけど、何だか母ちゃんの腹の下にいたころ嗅いだ空気の匂いと同じだと思った。

元さんたちは、俺の入った檻をトラックから降ろし始めた。運ばれるとき檻がゆらゆらして、俺は転びそうになった。それで、

「ウーツ」

っていったら、檻の片方を持っていたもうひとりの人が、手を離したんだ。俺が入っている檻はその場に落ちて、入り口の格子が開いたんだ。俺は横倒しになった檻の中で体制を立て直して、できるだけ檻

の隅の方に張り付いて縮こまっていた。なにしろ、何をされるのか見当がつかなかったからね。そばにいる元さんも、いつもとようすが違うんだ。いつもよりも怖い顔をしているんだ。それに、元さんももうひとりもさつきからほとんど一言も喋らないんだ。元さんは格子の開いた檻の前にかがんで、俺を呼びながら、懐からクリを一掴み出して檻の前に置いた。

「羅漢。食え。俺がやる最後の食いものだ。これからは自分で探してちゃんと食えよ。他の何者にも負けずに生きていってくれ。それから、鉄砲うちになんか捕まったらだめだぞ。」

それでも俺が檻の奥から出なかつたので、元さんはクリをそのままにして、檻から離れた。二人はトラツクの傍に戻って、話もせず、タバコをふかし始めた。ずいぶん時間がたつたので、俺はクリの方にそ

っと近づいていった。元さんたちは知らん顔をして
いるようだ。俺はクリを食べ始めた。腹が減ってい
たのでうまかった。あるだけ全部食べてしまうこと
にした。そのとき後ろでガタンと大きな音がした。
俺はあわてて檻に逃げ込もうとしたんだが、俺がク
リに夢中になっている間に、そっと近づいていた元
さんたちが檻の格子を閉めてしまったのだ。俺は格
子を押して中に入ろうとしたがだめだった。すると、

元さんたちはいつの間にか長い棒を持っていて、俺を小突き始めた。追い払うみたいだ。俺は元さんたちの棒が届かないところまで離れた。元さんたちはまだ棒を振って、俺を追い払おうとしている。いったいどういふことなんだ。俺は元さんの顔を見た。昨夜俺の檻の前で話していたときと同じような悲しい顔である。泣いているようにも見えた。俺も悲しかった。どうしてこんなことをされるのかわからな

かった。俺がその場に座り込んで、元さんを見てみると、二人は棒を振り上げながら俺の方に襲い掛かってくる。俺は少し逃げてから、さつきと同じように振り返って座った。すると二人は、もう俺を追いかけないで、檻のところに戻ると、それをトラツクに積んで、走り去ってしまった。』

〔二〕

二日目、首都圏を抜けると車は順調に走り出した。この調子だと予定通り今夜、日付が変わる前に会社に着けそうだ。吉田さんは、再び話しの続きを始めた。

リがいくつか散らばっている。それを食べると、元さんや子供たちを思い出した。檻の匂いをたどって道路に出た。そこで檻の匂いは消えたが、トラックの匂いが強く残っている。その匂いの続いている方に少し走った。しかし、その匂いもだんだん薄くなっている。俺は、また檻のあったところに戻った。そこには、檻や元さんたちやクリの匂いがはつきりと残っている。俺は、そこに長い時間寝そべっている。

た。少し眠ったらしい。顔に陽が射し込んできたので目が覚めた。俺は明るく見通しの利く森の縁に寝ていたのだ。何者かに見られるのは怖いという気持ちかわいてきて、慌てて薄暗い森の中に入り込んだ。

森の中は広い。繋がれていないので、どこにでも自由に行くことができる。俺は水の音が聞こえる方に下りていった。冷たい水に足を漬けると気持ちよ

かった。その水を少しだけ飲んでみた。元さんのところの水と違って、すごく冷たくておいしい。俺は、はらいっぱい飲んだ。こうしている間、森の中には俺以外誰もいない。水から出て大きな木の傍に座った。鼻の前を小さな黒い虫が忙しそうに動き回っている。元さんのところでも見たことがあるアリだ。俺は、舌を出してそれらを舐めとって食べた。苦味があつて悪くない。しかしいまは、腹は減っていないな

いので、森の中を歩いてみることにした。森の中は、キーキーと鳥の鳴き声がやかましい。元さんのところで聞いた鳥の声とは違う鳥もいるみたいだ。だけど俺は鳥にはまったく興味がわかないんだ。

薄暗い森の中は、盛り上がったたり深く落ち込んだりしてどこまでも続いている。ふいに、母ちゃんの匂いに似た匂いを感じた。注意深くその方向を嗅いだ。確かに母ちゃんの匂いに似ている。嬉しくなっ

てその方角に行こうとして前の方を見ると、黒い大きな動物が下のほうで、鼻を天に向けて空気の匂いをさかんに嗅いでいる。母ちゃんに似た匂いはあそこから来ているんだ。でも、よく嗅ぐと母ちゃんの匂いと少し違う。俺は怖くなつて、気づかれないようにじつとしていることにした。向こうの匂いははつきりと漂ってくるが、こちらの匂いは届いていないらしい。黒くて大きな動物はゆっくりと立ち去つ

ていった。

その日、俺はそれ以外のものには出会わなかったが、夕方になっても喰うものがなくて、腹ペコになっていた。それに、誰もいない森の中で、あたりが暗くなってくる。俺は怖かった。元さんの所では、夕方になると必ず誰かがうまいものを持ってきてくれて、家の中からは賑やかな子供たちの声が聞こえ

てくるのだ。森は音もなく暗くなつていく。真つ暗だ。ときどき鋭い鳥の鳴き声が響く。俺は、動かないほうがいいと思つて、じつと座つていた。暗闇は不安を募らせる。俺が暗闇をじつと見詰めていると、二つの目が光つた。それはしばらくじつとしていたが、さつとどこかに消えていった。俺は腹をすかせたまま、朝までそこに座つていた。あたりが明るくなつてきたので、食べ物を探して昨日の水辺に行

くことにした。流れを見下ろすところに来ると、ひどく騒がしい。ひどい匂いも鼻をつく。ギューギューと騒ぎ立てながら、俺より少し小さめの動物が何匹も何匹も水辺で転げまわっている。俺はしばらくその光景を眺めていた。すると、その中の一匹が俺に気がついたらしく、みんなが一斉に俺の方を見たかと思つたら、ギューギューといっそう喧しく騒ぎ立てながら、先を争つて森の中に逃げていった。俺

は、あの動物は何匹もいるのに俺を見ると逃げているのだということを知った。俺は、彼らがいたところに降りていって、水を飲み、柔らかかそうな草を食べた。柔らかい茎は水気があつてうまい。特に実がなっている草は特別だ。俺は腹いっぱいになるまで、そこいらじゅうのうまさうな草を食い漁った。腹がいっぱいになったので、糞をしてから少し離れた場所ですむことにした。』

〔三〕

順調に見えたが、首都圏を抜けて流れがよくなつてきたと思つたのもつかの間、また車はのろのろ状態になつてきた。僕は窓から身を乗り出して前のほうを見ようとした。工事か事故か。でもそれらしいものは何も見えず、ただ延々と車の列が続いている。列を作っている何百台もの大きささまざまな車はみな、

もくもくとのろのろ行進に従っている。吉田さんは、仕方がないという表情でしばらく何か考えていたが、あきらめたような顔をしてから、羅漢の話に戻った。

『雪の多い冬のあるとき俺は鉄砲を持った猟師と犬どもに追われていた。俺の周りにまつわりつくように寄ってきて、騒ぎ立てる犬どもに腹が立ったおれ

は、生意気にすぐ近くまで来たやつ頭の頭にかぶりと食いついてやった。そいつは

「ギヤウーン」

と喚いてすぐに静かになったよ。俺があごに力を入れると、バリバリツと音がして生あつたかいものが口中に広がった。そいつの頭が砕けたんだ。それまでぴくついていた足の動きが止まってだらんとなつたので、くわえていた頭を吐き出した。俺の前に横

たわっている柔らかかそうな腹がうまそうだったが、いまはそれを喰ってる暇はなかった。犬どもがひるんだ隙に、俺は森の中に全速力で走り込んだ。後ろで

「ガーン」

と腹に響く音がして、俺は耳に噛み千切られたような痛みを感じた。でも振り返らずに走り続けた。森の中の急な斜面を走り降りた。どれくらい走っただ

ろう、苦しくなつて立ち止まると、もうあたりは静かになつていた。』

〔四〕

僕たちは二日目の夜遅くには会社に戻ってくる予定であつたが、この予測外の渋滞のために、予定は大幅に狂つてしまった。一般の国道を走っていると、

大きな街が近づくたびに車の流れが悪くなったり、時間帯によつてはひどい渋滞になったりするのには珍しくないが、街を出たところでこうなるのは、何か特別な理由があるのだ。吉田さんは、何か気になることがあるのか、羅漢の話が途切れがちになつていた。

『鉄砲を持った人間と、あの騒々しい小さな生き物は危険なんだ。母ちゃんが撃たれたときも同じだった。もつともあるときは、犬どもは母ちゃんにけしかけられていなかった。なにしろ母ちゃんは俺を抱いていて、動けないでいたのだから。』

森の中では、やつらは俺を見つけると、けたたましく騒ぎ立てて、鉄砲を持った人間に知らせるんだ。それからというもの俺は何度もやつらに見つけられ

て、危ない目にあつたことがあるよ。

元さんも鉄砲を持っている人間だが、あの人は他の人とは違ふんだ。俺を可愛がつてくれたからね。元さんの犬どもも、騒がしくて好きにはなれなかつたが、俺をいじめたりはしなかつた。俺に向かつて吼えたりしたら、元さんがひどく叱つていたからね。』

〔五〕

渋滞はひどくなる一方で、ついに流れは完全に止まってしまった。ぴたりと動きが止まってから十分、二十分と時間が過ぎる。前後の車から人が降りて、何が起きたのか探ろうとして前の方を背伸びして見ている。大きなトラックでは、背の高い運転席から遠くを見ている者もいる。反対車線の車がまばらに

走っていく。吉田さんが、

「上りもめったに通らんから、事故があつたのかも知れんなあ。この感じだと現場はだいぶ先かも知れん」

そのとき僕たちが止まっていたのは、両側に山の迫った人里はなれた寂しいところだった。僕たちの前を走っていた大型トラックの運転手が、先ほど車を降りて前のほうに走っていくのが見えた。いまその

運転手がゆっくりと歩いて帰ってきた。トラックの前
前に止まっている乗用車の運転手が声をかけた。

「何かわかりましたか」

トラックの運転手は手を振って、

「だめだめ。どこまで続いているか、ぜんぜんわか
らん。こりや、長引くかも知れんで・・・」

さらに十分くらいたったとき、後ろのほうからサイ
レンの音がして、反対車線側を消防車と救急車が並

んで走っていった。空いているようでもときどき前から車が来るので、用心深く走っていった。やはり事故らしい。消防車ということ、衝突で車両火災でも発生しているのだろうか。五分もしないうちに、また後ろからけたたましくサイレンを鳴らした消防車が二台走っていった。パトカーが上り車線を逆送しながら、五キロ先のトンネルで事故による火災が発生して上下とも完全に通れなくなっていることを

拡声器で渋滞の列に知らせたのは、止まってから四時間以上たつてからだった。それを聞いた運転手たちは、いらだちをパトカーに向かつてぶつけた。窓を閉めたままのパトカーは、そのような罵声が聞こえないかのように、自分たちの役目のアナウンスだけを繰り返しながら、ゆつくりと通り過ぎていった。それからさらに二時間もしてから、後ろのほうから順に、迂回路に車を誘導する動きが伝わってきた。

そのこともパトカーが知らせて歩いた。乗用車や二トン車以下の車は、その場でユーターンしてさっさと走り去つて言った。何時間もたつてからやつと誘導されるよりもずっと前から、ユーターンしていく車はときどきあつた。前のほうから上り車線を来る車は、いま考えるところでそうした小さな車ばかりだった。きつとユーターン組みだったのだ。車の大きさからするとターンが可能でも、このあたりの土地勘がな

いものは、山間の一本道でどうするのがいいのか、なかなか判断できないでいた。少々渋滞を我慢しても、変な道に迷い込んでしまうよりも、開通を待ったほうが結局早いという判断もなかなかすてがたいものである。吉田さんもさつきから盛んに道路地図を見ているが、どうすべきか迷っているようだ。僕たちの車は、四トン車だが、長尺ではないので無理をすれば、この場でターンができそうなのだ。吉田

さんもそれはわかっているのだが、このあたりは点々とトンネルが多い山の中で、事故が地図上のどのトンネルなのかわからないし、まともに迂回できそうな道路も、現在位置がはつきりしない以上、目算が立たない。吉田さんの予想による現在位置からすると、そのような迂回できそうな道路は、少なくとも十数キロ戻らないとないらしい。それも吉田さんの現在位置予測が当たっていればの話である。

しかし、警察が迂回を誘導し始めたからには、開通の見通しがないらしい。はるか渋滞の後方から順に大きなトラックを誘導する笛の音が聞こえてくる。大型トラックはターンできる場所までバックして行かなくてはならない。僕たちは、その場で何度も切り返しをしながらターンした。そして半日も前に来た道を逆戻りし始めた。途中あちこちでターンする車のために止まって待った。大きなトレーラーは

延々とバックしている。何キロバックすれば、こんなのがターンできるところがあるのだらうと、吉田さんがつぶやいた。僕たちがいくつかトンネルを通って、三十分も走ったところで、やや大きな道との交差点に出た。そこに屋根の赤い灯をちらちらさせたパトカーが止まっております、警察官が近寄ってきた。吉田さんが窓を開けると、警察官は行き先を聞いた。吉田さんが、

「広島」

とぶつきらぼうに答えると、警察官は白黒の棒で指し示しながら、

「右折して約十分走ったら県道×××号線というのに出ますから、そこを右に行ってください」

といった。吉田さんは、黙って頷いてから車をスタートさせた。そうしていくつかの集落を通り越してもとの国道の、事故現場の先の方に出たのは、渋滞

に巻き込まれてから七時間近くもたつてからだつた。吉田さんは、その間羅漢の話を続けかけたときもあつたが、すぐに話が途切れてしまつて、ついには長い時間無言で運転を続けた。僕は、一度だけ運転を代わろうといつたが、吉田さんは、

「まだいい」

といつただけで、何かを考え続けているように見えた。そのとき僕たちは二人とも、渋滞の原因がわか

り、大変な時間をくったとはいえ、本来の国道に戻って走り始めたことで、多少はほつとしていた。だが、吉田さんは相変わらず何事か心配事でもあるように硬い表情を崩さない。僕は大幅に予定が遅れたことを気にしているのだろうと思った。はじめのうち僕は、お客に荷物を届けるのは指定どおりの時間にできたのだから、あとはのんびり帰っていけばいいじゃないかとのんきに考えていた。それにその方

が羅漢の話がたくさん聞けるとさえ考えたのだ。しかし、そんな甘いものではないことが会社に帰ってからわかった。

早ければ夜の十時前には着ける予定だったのに、僕たちが会社に着いたのは翌日の午前九時過ぎだった。広島県に入ってから朝の混雑時間にさしかかかって、昨夜会社に連絡した予想時間よりもさらに何時間も遅れたのである。

会社では、もうその日の仕事が始まっていて、車庫の車も多くは出払っていた。吉田さんと僕は、勤務の報告をするために社長のところに行つた。吉田さんは、報告を始める前に、今朝自分に当たつていたはずの仕事はどうなったのかを社長に訊いた。社長ははじめから不機嫌だった。

「あんたが大丈夫だっていうから、代わりを当ててなかつたんよ。今朝になつて、昨夜夜中に帰つてき

て、今日は遅番の××君を電話で呼び出して、無理に頼んで行ってもらった。だいたい一人で行くところを助手までつけてやったのに、どういふことなんだ」社長は、喋れば喋るほど腹が立ってくるという風だった。何人乗っていても大事故の列に巻き込まれてしまつたら仕方がないじゃないかと僕は思ったが、何もいわなかつた。昨日の事故が、関東地方の山中のトンネルでの衝突火災事故で、いまもその区間が

通行止めになっていることは、朝食のために入ったメシ屋のテレビで見えて知っていた。当然社長も事故のことは昨日のうちから知っていたはずだ。社長は吉田さんの業務報告も聞きたくないといった風に、自分のいいたいことをまくし立てた。どうも社長がいいたいのは、吉田さんがいち早く事故の情報を察知して、はじめからそこを迂回するコースを取らなかつたことと、ユーターンしたあと高速道路を使つ

て帰つてこなかつたことをいつているようだ。僕は、社長がいつも必要もないのに有料道路なんか使うなといつてゐるのを思い出した。だいたいどうやってあの場合に事故のことを察知できたというのだらう。僕は、吉田さんのそばにしよんぼりと立つて、叱られてゐるのがひとつのようにな、そんなことを考えていた。吉田さんは、自分の息子と同じくらいの年の社長に、

「ふだんからもたもたと仕事をして会社にとっては迷惑なことだ」

とまでいわれても、腹の前に手を結んで、ときどき相槌を打ちながら黙って聞いていた。吉田さんと僕の二人乗務だったのだから、もし僕たちに非があるとしたら、僕も同罪だと思うのだが、社長は吉田さんだけに向かって言っていた。アルバイトの僕よりも、ベテランの吉田さんがいろいろな判断の責任が

あることは当然であるが、自分がいかにも一人前と見られていないようで情けなかつた。社長の怒鳴り声は、狭い事務所の中に響き渡り、一人だけいる事務員のおばさんや何人か残っていた運転手たちにもみな聞かれていた。その間、何本か電話の応対をすゝる事務員の声があった。ただで、だれも声を出さなかつた。僕は、みな長々と叱られているわれわれに同情しているのだらうと感じた。

ようやく社長のはなしが終わった。それでも最後には、穏やかな声になって、

「まあ、あんたたちが事故にあつたんじゃないのだから、よかつたよ。ごくろうさん」と結んだのだった。

ようやく解放されて、乗ってきたトラックの整理をするために、事務所の外に出たとき、それまで中で社長の怒声を聞いていた運転手仲間の一人が、う

しろから吉田さん呼び止めた。みなは吉田さんのことを『大臣』と呼んでいたが、この人だけは、吉田さんの頭が薄いことから、『はげ大臣』というのだった。僕もこの人はなんとなく苦手だったが、コンビになったことにはないし、特に関わることもなかった。たので気にしていなかった。

「はげ大臣よ、災難だったな。今日のことだけじゃなくて、日ごろのこととも反省しろよな」

顔は薄笑いしているが、言葉の調子には棘がある。

「迷惑かけてすみませんでした」

吉田さんは頭を下げた。

「すみませんですむと思ってるんか。このおいぼれが」

なぜかその運転手はけんか腰になってきた。薄笑い
は消えて、獣が凄むときのよ様な表情が見えた。

このとき僕は、前にもこの人が同じ表情を見せた

ことがあるのを思い出した。それは一月くらい前、外から仕事を終えて帰ってきた吉田さんが車から降りると、この人が吉田さんに近寄っていき、何か怒鳴りながらいきなり肩のところを突き飛ばしたのだ。吉田さんは大柄な方だが、いきなりだったので、いま降りたトラックのドアに倒れ掛かるようによろけた。そのときは、吉田さんが帰ってきたら、その車を使おうとして待っていたのに、吉田さんが予定よ

り遅くなつて帰つてきたことに腹を立てたのだった。他にも使える車はあつたのだが、たまたま吉田さんが乗つて出た車が新車だったので、いまかいまかと帰りを待っていたのだった。結局その時間からでも間に合つたようなのだが、いらいらしていたのと、この人は元来短気らしいのだ。

吉田さんは短気ではない。僕は吉田さんが怒つたのを見たことがない。アルバイトの僕と組まされる

ことが多い吉田さんは、仕事のことかわからない僕に、ずいぶん足を引つ張られたと思うのだが、いつも親切に根気よく教えてくれる。特に積荷を縛るロ―プの結び方を僕はなかなか飲み込めず、何度も同じことをきいたものだ。そのたびに、

「これは俺もなかなか覚えられなかつたよ。だがこれだけは確実にやっとかんとな」
と、丁寧に教えてくれたものだ。

「ふん、いいかげんにしてくれよな」

あまりの表情に、殴りかかってでも来るかと思つたが、その人は捨て台詞のようにいつてトイレの方へ歩き始めた。そのとき、

「俺がなに悪いことしたつていうんだ」

というなり、吉田さんはその人の肩に手をかけて向き直らせると、その人の頬に思い切りパンチをかませた。その瞬間の吉田さんの表情を僕は忘れること

ができない。いいがかりをつけてきた人の表情のこ
とを、獣のようなどといったが、吉田さんのはそれ以
上だった。怒り狂った猛獣そのものだったのだ。そ
の人はその場に尻餅をついた。吉田さんの表情はも
う、いつもの穏やかさに戻っていた。怒声とガタガ
タという物音に、事務所から二、三人出てきて、起
き上がって吉田さんに殴りかかろうとしている運転
手を止めた。

「爺さんなんか殴つてどうなるんだ」と、止めに入った運転手がなだめた。

「そのくそ爺が手を出しやがったんじや」
止める手を振り払おうとするが、止めに入った方が強いらしく、振り払えない。男は依然として獣のような表情をしているが、僕はさつき吉田さんが一瞬見せたものすごい表情に比べると、臆病なやせ犬が尻尾を足の間に巻き込みながら、半分逃げ腰で凄ん

で見せているような哀れさを見て取った。

吉田さんは、

「すまんことをしました」

と、その男に謝って、車の方に向かった。僕もその後が続いた。僕は、男が後ろから飛び掛ってこないか心配だったが、彼は、

「あれで、二日分の夜勤手当をせしめるんだから要領がいい奴よ」

と、せせら笑うように言いながら、事務所の中に入
っていった。

僕は、吉田さんの、自分が羅漢だったころの話と、
目の前にいる吉田さんの穏やかな人のよさそうなお
じさんぶりがひどくかけ離れていると思っていた。
きつと、いつもお人よしでいることに対する反動で、
深層心理にある願望が森の王者のような羅漢の物語
をさせているのではないかと思っていた。しかし、

さつきほんの一瞬見せた、信じられないような表情は、まさに羅漢が吉田さんに移ったように思えるものであった。このときから僕は、吉田さんにある種の畏敬の念を持ち始めた。

〔六〕

僕は、運送会社のアルバイトを一年でやめた。相

変わらず親の家に居候していた僕は、大急ぎで次の仕事を探さないとならないほど、生活への緊迫感を持っていなかっただので、気がかりなことを済ませてから、職探しにかかろうと決めた。

どうしても気になったことというのは、吉田さんが話していた、いや吉田さん自身が羅漢であつたころ生活した地域を見たかつたのである。それがどの

あたりなのかは、吉田さんの話の内容からおよその予想は立てていた。広島県、島根県、山口県にまたがる西中国山地では、ツキノワグマと人間の生活圏が接近しているということは、本で読んで知っていた。

僕は父の四駆が空いている日に、心当たりの町々をまわってみることにした。手がかりは、元さんと

いう子グマを飼っていたことのある猟師を捜し当てることであつた。元さんの年令であるが、勝手にすでに物故しているのではないかと予想した。なぜなら、現在の吉田さんが六十歳くらいで、それにツキノワグマの平均的な寿命を七、八年とすると、羅漢が元さんに飼われるようになったのは、いまから七十年近く前のことになる。そのとき元さんが何歳であつたかによるが、吉田さんの話では、元さんの家

には子供たちがいたようである。それが元さんの子供であるとしたら、元さんは三十代か四十代だったかもしれない。いまも存命なら百歳以上になる。元さんが生きている可能性よりは、やはり亡くなっていく可能性のほうが高いと考えると、やはり支えられないであろう。それも、現在の吉田さんが、羅漢の直接の生まれ変わりであるとした場合の計算である。吉田さんの話のように、羅漢としての生命が消えた瞬間に、

その生命は次の肉体に宿るものなのかも、まったく架空ともいえることである。生命が宿るといっても、それは受精の瞬間を指すのだろうか。

これらのことは、考えてもわからないこととして、僕はとにかく元さんなる猟師のことを調べることにした。

僕が調べ始めて、二つ目の町で猟友会の会員という人を訪ねたときに、幸運にも「げんさん」に行き

当たった。正確には、最初の「げんさん」情報に出会ったというべきである。しかし、その「げんさん」は、いま三十歳の猟友会員で、本職は沿岸部まで車で通勤しているサラリーマンであつた。三つ目の町では、話を聞いた猟友会の長老に、「げんさん」と呼ばれてもおかしくない名前の知り合いが二人いるということであつたが、いずれも狩猟とは関係がない人であつた。ただ、その八十歳になつたという会員

さんは、自分よりずっと年上の猟師で、クマを飼っている猟師がいたと聞いたことがあると、かすかな記憶を呼び起こしてくれた。その猟師の名前は覚えていないが、たしか隣町の人だったといふのである。僕は嬉しくなつて、その八十歳のおじいさんの手を握るようにして礼をいった。おじいさんは、隣町で昔のことを知つていふとお年寄りのところを教えしてくれた。僕は、教えられた家に直行した。

「げんさんなら、よく知っているさ。わしは、獵のことをげんさんに教えてもらったことがあるよ」と、七十歳だというお年よりは言った。

「わしは結局獵師にはならなかつたんだが、げんさんとは、最後まで付き合ひがあつたよ」

「最後までというと、亡くなつたのですね」

「そりやそうさ。生きていたらとうに百を越えてい
るさ」

「いつごろ亡くなったのですか」

「うーん。いつごろじゃったかのう。なにしろげんさんは、わしの親父と同じくらしいの年じゃったから」
僕は、この人がいう「げんさん」が探している「元さん」だという気がしてきたので、

「そのげんさんという人は、クマを飼っていましたか」

と、核心部分の質問をした。

「どうじゃったかのう。そういえば、子グマを飼っていたことがあつたかも知れんのう。獵師が冬ごもりのクマを撃つたときは、子グマを連れていくことがよくあるんじゃないや。それを連れて帰って飼つたのかのう。そういうことは、げんさんと獵師なかまじやつた、常さんがよう知つとるじゃろう。ちともうろくしとるが、クマのはなしだけは確かじゃよ」

と、いって、車で二、三分の常さんの家を教えてくれ

た。

山口常蔵さんは、縁側で日向ぼっこしながらこつくりこつくりしていた。僕が、

「常蔵さんですか」

と、声をかけると、はじめぼんやりと僕の顔を見ていたが、ずいぶん間をおいてから、

「常蔵ですが、何じやろうか」

と、僕の存在を認識してくれた。僕は、簡単に自己

紹介をして、この町を訪ねてきた理由を手短に話した。常さんは、早口で喋る僕のいうことが、すぐには飲み込めないような様子に見えた。それでも、七十のおじいさんのところで聞いたげんさんの話をすると、

「げんさんは二人おつてのう、あんたがいうのは『羅漢の元さん』のことじやろう」

と、完全に僕が早口で話したことを把握していたこ

とを示す返事が戻ってきた。

僕は衝撃を受けて、しばらく声が出ないくらいであつた。僕はおそるおそる聞いた。

「いま羅漢といわれたのは、ツキノワグマの羅漢のことですか」

「そうじゃ。羅漢のことはこのあたりじゃあ、知らん者はおらんよ。もつとも今の者は知らんかのう。なにしろ古い話じゃけえのう」

僕は、少しだけがっかりした。『知らん者がいない』
ような話なら、六十歳の吉田さんがこの話をどこか
で聞いて知っていて、それを面白くしながら、夢中
で聞く僕に物語ってくれたのであろうか。

もちろん、その可能性もあるだろう。むしろ、そ
の可能性が高いかもしれない。でも、吉田さんの話
のとおり、吉田さんの前世が羅漢であつたという可
能性もゼロになつたわけではない。僕は、関係ない

だろーうと思ひながら、つい聞いてしまった。

「常蔵さんは、吉田茂つていう人をしつていますか」
「年寄りじゃからいうて、ばかにしたらいけん。吉田茂を知らん者はおらんじやろーう。『ばかやろー』いうたり、新聞記者に水ぶつ掛けたり、今の政治家には比べ物にならんくらい骨があつたお人じや。ほんまに、いまごろのへなへなした大臣とはちがつとつたなあ」

「いや、総理大臣の吉田茂じゃなくて、いま六十くらいなの、普通の人の吉田茂さんです」

「そんな人は知らんよ」

僕は、少し安心した。吉田さんが、もちろん人間として今の吉田さんが、このあたりのことをよく知っているようだったら、僕の期待はさらに薄まるよ
うな気がしたからだ。

僕は、常さんの記憶の中に、すべての鍵があると

思うと、ぞくぞくするのであつた。

「その羅漢の話の話を聞かせてください」

僕ははやる気持ちをおさえ、そういつた。常さんは、もうろくどころかきらきらした目をして話し始めた。「あれは、わしはまだ若くて、猟を始めたばかりのころじゃつた。わしは、元さんに猟のしかたを教えてもらつとつたんじや。あの年は、クマの被害が多かつたんじや。山の木の実が出来が悪かつたんじや。

秋にカキやクリがずいぶんやられてのう。木の実を食われるだけなら、多少のことは大目に見てやつてもいいんじやが、クマが里に出てくるのは、子供や老人にとつては危険なことじやからのう。冬ごもりの時期に、里から遠くないところで冬ごもりしてるクマを、予防駆除することになつたんじや。その冬だけで、わしは元さんたちと一緒に、冬ごもり中のクマを三頭も撃つたよ。子グマを抱いて冬ごもりし

てる母グマは、人が近づいて危険になつてもめつたなことでは動かんのじゃ。黒い目でこつちを見つめて動かんでいる母グマを、近いところから撃つのは、獵師として忍びないのじゃが、役所の方針でやることなので、仕方がないんじゃ。生まれたばかりの子グマは、小さいもので、寒い時期に母グマが撃たれて死んでしまふと、育たないことが多いんじゃ。その年に撃つた三頭とも子グマを抱いていたんじゃ。

別の猟師が連れて帰った二頭の子グマは、すぐに死んでしまったんじやが、元さんが連れて帰った子グマだけは、死なずに育ったんじや。元さんが子グマを育てようとしたのは初めてじやあなかつたが、成獣まで育つたのは初めてじやつた」

「その子グマが羅漢なんですか」

僕は、知りたいと思つて、早く確かめたくて訊いた。

「そうじゃ。元さんは、どうせ育たんじやろうと思つて、名前なんか付けずに育てていたんじやが、そいつがしつかりした子グマにまでなつたのを見て、名前を考え始めたんじや。」

「羅漢て、仏道の修行者のことでしょ。どうしてそんな名前になつたのですか」

「修行者？　そういえばそうじやな。五百羅漢とか仏像があるからな。でも、違うんじや。母グマを撃つ

た場所が、羅漢山の麓の方じゃったから、羅漢というわけじゃ」

「なんだ、そういう単純な名前だったんですね」

「子グマはちっちゃくて可愛いもんじゃが、少し大きくなつてくると、どうしても乱暴になつてのう。

元さんも手に負えなくなつて、羅漢をどう始末するか迷っていた。元さんところには子供もいたしね」

「始末？」

「よく檻に入れて、しばらくは飼ってみるんじゃないが、結局は撃ち殺すことが多いんじゃない。でも、元さんにはそれができんかったんじゃないや。それで、山奥に連れて行って、放したんじゃないよ」

「それからのことも、羅漢について何かわかってい
るのですか」

「七、八年たってから、元さんが放した山から相当離れた場所で撃ち殺されたクマが羅漢らしいという

ことじゃった。元さんは、だいぶ後になつてから、その話を聞いたそうじゃが、撃ち殺されてすぐに現場にはいけなかつたので、それが間違ひなく羅漢だつたかどうかは、確認されていないんじや」

「じゃあ、そのときはまだ撃たれていなかったかも知れないんですね」

「まあ、そういうことじゃが、そのころ明け方に、元さんの家の裏山の岩の上に現れるクマが何度か目

撃されておつて、それが羅漢だと評判じゃつた。なにしろ、そのクマは、岩の上に立つて、狼みたいに空に向かつて吼えたというんじや。朝もやの谷間に響くその声は、ひどく悲しげで、村の者は羅漢が元さんと呼んでいるんじやといつとつたらしい。それが、撃たれたといわれたあとは、一度もそこに現れなくなつたから、おそらく間違いないじやろう」

「元さんは、その声を聞いたり、羅漢の姿を目撃し

なかつたのですか？」

「ああ、そのころ元さんは、岐阜や、秋田の方にツキノワグマの保護の調査に呼ばれて長く行つとつたんで、う・・・。帰つてきたときには、もう撃たれたあとじゃつた」

「羅漢が現れるという岩というのは、どこにあるのですか」

常さんは、簡単な地図を描いて教えてくれた。僕は、

さらにいくつか羅漢に関する話を聞いてから、羅漢の岩に向かった。

それは常さんの家から車で二十分ほどのところであつた。教えてもらった元さんの家と思われる農家作りの赤い瓦の家が見つかった。常さんの話では、元さんの一家は、元さんが亡くなるとまもなく広島に越していったので、いまは別人が住んでいるとい

うことであつた。僕は、その家の位置を手がかりに、裏山の岩というのを探した。常さんの説明を聞いているときは、元さんの家の庭先から見上げるようなところに、その岩があるのかと思つていたが、そうではないらしい。元さんが住んでいたという家の裏手から、山の斜面までは三百メートルくらい離れていて、しかもそのあたりの山は低い丘陵になつていて、植林された木々がびっしりで、それらしい岩は

わからない。僕は、常さんの地図を頼りに、そのあたりを車でぐるぐる回った。一キロ以上離れたところまで搜索範囲を広げると、見上げるような尾根が現れた。その五十メートルくらい見上げたところに、雑木に埋もれるように、白く大きな花崗岩の岩が見えた。常さんがいつていた形そのままである。

僕は、ついに羅漢を見たような錯覚で、しばらく感激してその岩を見上げていた。我に返って、車か

ら最近手に入れた十倍ズームのデジタルカメラを持ち出し、ズームで精一杯引き付けてその岩を写した。それから何枚も何枚も周辺の様子を写した。元さんの家だったという家も、遠くから何枚か撮った。そして、もう一度岩の見えるところに戻って、しみじみと眺めた。あの岩に羅漢が現れたところを一生懸命に想像してみた。しかしこの遠さだと、日の出前の早朝に、黒い羅漢が岩に立っていても、よほど注

意しているか、双眼鏡で監視でもしていないかぎり、目撃されにくいのではないかと思えるのであつた。

僕は、家に帰ってから写してきた写真を見たが、あの岩はいつぱいにズームで写したのだが、白い小さな点のように写っているだけで、とてもクマが狼の遠吠えのように吼えている姿を思い描くことができるような写真ではなかつた。

〔七〕

僕は、もう一度吉田さんに会いたくなつて、第一トラックを訪ねた。吉田さんはもうだいぶ前に第一トラックを辞めていた。僕がアルバイトを辞めてほどなく、定年を目前にしての自主退職らしい。僕は、事務の女性から吉田さんの住所を訊いて、その日の夕方訪ねていった。吉田さんは運良く在宅で、僕を

歓迎してくれた。こじんまりとしたきれいな家で、奥さんと二人で暮らしていた。三人いる子供さんたちは、それぞれ独立して元気にやっているという、夫婦二人の悠々自適のように見えた。奥さんも気さくな人で、吉田さんが僕を紹介すると、

「あなたと前世の話をしたんでしょ。それ以来、この人は自分はツキノワグマだったって、いいだしたんですよ。それまでは、山犬だったとか、イノシシ

だったとかいろいろでしたかね。どうも、あなたと話をしてから、はつきりしたらしいのね。まあ、そんなこと想像して楽しんでいるのですから、罪がないですわね」

そういつて笑うのであつた。どうやら、吉田さんは、奥さんにも前世の話をしたらしいが、奥さんには本気にされていないらしい。

「女房は信用しないんじや。俺は、女房の前世はウ

サギだったと見てるんだ。だから前世で出会っていたら、俺はこいつを食い殺していたかも知れんのさ。出会ったのが、この世で、こいつは運がよかったつてわけさ」

「前世でウサギだったとしても、きつとあなたとは住んでた山が違うでしょ。だから、あなたに食べられることなんかありませんよ」

なんとも他愛ないやりとりであったが、吉田さんは

本気で自分には前世の記憶があると信じているのだし、僕も常さんの話を聞いた今は、吉田さんの話を完全に信じ始めているのだ。

吉田さんは、僕を自分の部屋に案内してくれた。部屋に一步入った僕は、部屋のいたるところに置かれたモデルシップに目を見張った。精巧な帆船や客船が何十隻と出窓にも、棚にもサイドボードの上に

も、堂々とした姿で置かれている。そして、机の上には作りかけと思われる優美な客船がある。「クイーンエリザベス二世号」らしいことは僕にもわかる。その周りには、これから組み込まれる無数の部品が散らばっている。どの船も、それは見事な出来栄えであつた。吉田さんは僕に椅子を勧めながら、

「早々と会社をリタイヤして、こんなことをやっているんですよ。もちろん趣味だけどね。多少はアル

バイトにもなるんでね」

吉田さんは、友人がやっている大きな模型屋の製作見本作りを手伝っているのだった。灰色の作業服姿で、運転手仲間に年寄り扱いされ、会社からは他のものが嫌がるような仕事の引き受け役にされて、何の小言も言わずに働いていた吉田さんからは、まったく想像もできない、ゆつたりとした姿であつた。

僕は、そんな吉田さんに、常さんから聞いた話をした。吉田さんは、だまって頷きながら聞いていたが、僕の話が終わると、

「俺は、そのあたりには一度も行つたことはないね。運送の仕事で山陰に抜けるのに、その近くを通ることはあつたけどね。でも、そこが俺の前世の住処だとしたら、えらく近いところに住んでいたんだなあ」

「吉田さん、一度、一緒に行つてみませんか。その

あたり一帯は、ツキノワグマの生息地として知られている西中国山地でも、特に人里と、クマの活動範囲とが接近しているところらしいですよ。だからと
いって、そこに行つて、吉田さんのことを、『この人がもと羅漢です』っていつても、誰も信じないでしょうがね」

吉田さんと僕は、それから間もない天気の良い日を選んで、羅漢が住んでいたあたりに出かけていつ

た。僕たちは、まず役場にいつて、ツキノワグマの
情報に詳しい人がいないか訪ねてみた。受付の女性
に来意を告げると、

「少々お待ちください」

と言つて、奥の方に小走りに誰かを呼びに行つてく
れた。何か話を聞くことが出来る人がいるらしい。
すぐに先ほどの女性が戻つてきて、担当のものがま
もなく来るから、ロビーの椅子で待つように言つた。

ロビーには、町全域の立体的な地図が壁いっぱい張りつてある。僕たちは、山地ばかりのその地図を見回した。このどこかに吉田さんがツキノワグマの羅漢として暮らしたことがあるのだと思うと、ただの山間の町の地図とは思えないのであつた。

「お待ちたせしました」

とうしろから声がかかったので、振り返ると、まだ三十代と見える丸刈りの青年が笑顔で挨拶した。

「どんなことでしょうか？」

「お忙しいところをすみません」

私が恐縮して挨拶すると、吉田さんは待ちきれないように、

「羅漢と呼ばれていたツキノワグマのことを聞きたいのですが、何かご存知で不是吗？」

と急ぎ込んで訊いた。唐突だったので戸惑ったような顔で、丸刈りの青年は、

「羅漢といひますと？」

と聞き返した。ここは僕の出番だと思い、獵師に飼われていて、成長してから奥地に放獣されたことや、町を見下ろす岩の上に現れた話などを手短にした。

僕が話している丸刈りの青年は興味深そうに頷きながら聞いていたので、何か手がかりを知っていそうだと期待したが、

「私は、そういう話は聞いたことがありません。そ

のようなことでしたら、誰か年配の猟師の方に聞かれた方がわかるのじゃないですか」

というのであった。僕たちは、最近のツキノワグマの状況などを少し聞いて役場を出た。僕は、とにかく吉田さんをあの岩のある場所に連れて行くことにした。

僕の四駆で、昔元さんが住んでいたという家の前を通った。吉田さんが何か思い出すのではないかと

思つて、わざと速度を落としてその前を通り過ぎた。それが昔元さんの家であつたことは、敢えて話さなかつた。吉田さん自身の記憶、もつとも前世の記憶であるから『記憶』と言つていいのかわからないが、が有るか否かを知りたかつた。吉田さんは、その家の方を見ていたが、特別な反応は示さなかつた。僕は、一キロほど先の例の岩がある尾根のところまで行き、少し広くなつたところに車を止めた。吉田さ

んを促して車の外に出た。

ちようど尾根と反対側の野良で草を刈っている人がいたので、岩の近くまで行きたいのだが、どこから登っていけばいいのか訪ねた。その人は、山仕事の人が入っていく道があるが、普段使われていないので、通れるかどうか分からないと教えてくれた。

僕たちは、教えられた道に踏み込んだ。たしかに道らしいものの痕跡は認められるが、草が覆いかぶ

さつて、一歩一歩確認しながら進まなければならなかつた。しばらく藪を漕ぐように進むと、軽四輪が通れるくらいの道に出た。

「なんだ、初めからこれを来れば簡単だったのに」
僕は、歩みにくい道を教えてくれた人に恨み言を言った。そのとき、

「こつちですね」

と吉田さんが、車道から外れた方向に進み始めた。

よくみると、何となく人が通つたような跡が微かに認められる。しかし、足元には踏まれた跡があるのに、木の枝や絡み合つた蔦がいつぱいでとても進めたものではない。吉田さんは、身をかがめて進み始めた。それまでただ僕の後ろを付いてきていた吉田さんが、急に自分から行動を始めたようなので、僕は動悸が止まらなくなつた。吉田さんの前世の野生が、ここに来て呼び戻されてきたのかも知れないと

思つたのだ。僕は、必死で吉田さんの跡を追つた。僕の腕は、棘のある枝で擦り傷だらけになつた。吉田さんの進み方が妙にすばしく思える。しやがみながら進むような不自由な格好なのに、やけにすいすい進む。まるで覆いかかる草や枝も何の障害にもならないかのような進み方である。僕は、ものも言わずに、何かに引き寄せられるように進む吉田さんのお尻を見ながら、まるでクマの跡をつけているよ

うな錯覚に陥るのであった。

やがて前方が突然開けた。そこは畳二枚分くらいの平らになった岩になっていた。僕は全身の震えが止まらなかつた。吉田さんと居るのではなく、羅漢の傍に居るのだと強く感じていたのである。ここに来る間、吉田さんがどんな表情で藪を突き進んで来たのか、後ろからではわからなかつたが、きつと吉田さんはツキノワグマになりきっていたとしか考え

られなかつた。

僕が吉田さんの居る岩にたどり着くと、

「大変な道でしたが、大丈夫でしたか」

と僕の方を振り返って言った。いつもの温厚そのものの吉田さんであつた。でも、そこは紛れもなく、羅漢が遠吠えをしたという岩である。

「車道を歩いていたのに、急に藪の中に入っていくからびっくりしましたよ。吉田さんは、どうしてこ

の道がわかったのですか？」

僕は、吉田さんに訊いた。

「何となくです。何も考えてしたわけではなくて、ただ直感的に……」

吉田さんはそう言いかけて、言葉を切って何かを思い返していたが、

「いや、直感と言うのも違うなあ。あるとき歩いていた車道は少しでも早く離れたいと感じていたよう

な気がしますね。誰かの目にさらされる危険を感じていたような気がしたのです。それから、藪の中の道は初めてでないような感じでしたし、とても心地よい道でしたね。この岩のところに来られると思つて、藪の道を選んだわけでもなかつたみたいですね」

「それは、吉田さんの前世の記憶というか、習慣というか、そういうったものに導かれたのじゃないですか？」

「わかりません、でもいまの行動は、他には説明のしようがありませんね。本当にそんなことがあるのですかね？」

『『あるのですかね』って、吉田さんがいつも自分には前世のことがわかるって言っているんじゃないですか』

「でも、いままでののは全部頭の中で感じたことだったでしょう。ところが今のは現実の行動だったのですか」

ね。われながら驚いていますよ。驚くというより、ゾツとしたという感じですね」

しかし、僕は吉田さんが運転手仲間を殴りつけたときの一瞬に見せた動物のような獰猛な表情を忘れていなかった。吉田さん自身ほどは驚かなかつた。そして、吉田さんの前世の記憶が作り話でないことを確信したのであった。僕は、この岩の上で吉田さんが何かを思い出すのを期待していた。しかし

吉田さんは普通の吉田さんに戻ったままで、

「ここは町全体が見下ろせるいい場所ですね。ここに来るちゃんとした道を作って展望台にすればいいのに」

などと言っている。僕も一緒に町を見下ろした。すぐ下はかなり急落下していて、はるか下のほうに斜面に　生えた木が見えているだけである。だから真下という感じのところには県道と並んで川が流れて

いる。県道の川の側の少し広がった広場に僕の四駆が見えている。左の方は谷が広がって民家がまばらに見えている。そのなかに元さんの家も見える。なるほど元さんの家の方からだと、この岩は小さくて木に覆われていて見えないが、こちらからだとよく見えるのである。

「そんなに乗りに出すとあぶないですよ」
家を確かめるために知らず知らずのうちに岩の端の

ほうににじり出していた僕を吉田さんが注意してくれた。

「吉田さん、さつき車で前を通ったのですけど、あすこ……あすこに一軒だけ離れた赤い屋根の家が見えるでしょう。あれが元さんの住んでいた家ですよ。羅漢もしばらくの期間あすこに居たはずですよ」

吉田さんは、用心深く岩の端に這い出して、僕の指差す方を見た。吉田さんは、何も言わずにじつと見

つめている。僕は見えにくいのかなと思つたが、考
えてみると吉田さんは普段も運転のときも眼鏡をか
けていない。運転のときだけは眼鏡をかける僕より
も目は悪くないはずである。吉田さんはさらにしば
らく何も言わずに元さんの家のほうを眺めていたが、
やがて目を離すと顔を空中に向けて鼻をヒクヒクさ
せ始めた。動物が空気の匂いをかいでいるのと同じ
仕草である。僕は吉田さんの顔を見た。心ここにあ

らずといった表情で、とても悲しそうな表情でもあった。吉田さんは前方の上空を仰いで口をあけると、のどの奥で

「クッ」

と声を出そうとして、はっと気がついたように、止めた。吉田さんはきまり悪そうに、

「何か変なことしませんでしたか？」

と僕に聞いた。僕は、吉田さんがこの数分間に見せ

た様子をすべて話した。吉田さんは、

「やっぱり、俺はここを知っているし、あの家も知
っている。このあたりの匂いも昔のままみたいです。
さつき藪の中に入ったのも、かぎなれた匂いに導か
れたような気がします」

それからは、少なくとも吉田さんと僕との間では、
吉田さんが前世でツキノワグマの羅漢であることの

確信が生まれていた。二人とも、それからしばらくの間、岩の上に座ったまま言葉をお互いに交わすこともなく感慨に浸っていた。僕は吉田さんに提案した。

「吉田さん、一緒にこのあたりの山を歩き回って見ませんか？」

「きょうですか？」

「いや、今日だけでなく時間があるときにです。一回だけでなく、おそらく何日もかかるでしょうが、

二万五千分の一のような詳細な地図で確かめながら、一つ一つの谷や尾根を歩き回るのです。それで吉田さんの記憶にある場所を、地図に書き込んでいくのです。そうすると羅漢が生活した地域がはつきりしますよね」

そこまで言つて、僕はハツと気がついた。そんなことが吉田さんにとって何の意味があるのかということにである。吉田さんは、自分がツキノワグマの羅

漢であつたことを確信したにしても、それは前世で
のことで、現在の吉田さんは、船の模型を作つてい
る一老人に過ぎない。ツキノワグマの生態を調査し
ようとしているわけでもない。そんなことにやたら
に興味を持ってワクワクしているのは僕の方だけか
も知れないのだ。

吉田さんは少し考えるように遠くの川が日の光を
受けて光っているのを眺めていたが、

「面白そうですね。君が一緒にやろうと言うのなら、俺も付き合おうよ」

と、僕が心配する必要などないといった風に、軽い感じで言った。

「ただ、俺がやってる船作りも結構時間が要るんでね。毎日というわけにはいかないけど、製作の都合を見ながらなら大丈夫ですよ」

吉田さんの協力的な返事に感激した。僕の頭の中で

は、吉田さんが羅漢時代に暮らした跡を追跡するというワクワクする企画の構想が猛烈な勢いで回転し始めた。

羅漢が生きていたのは今からおよそ六十年から七十年くらい前のことと考えられる。もつとも、この推測にはいくつかの仮定が含まれている。最も大きな、そして僕が最も知りたい点であるが、羅漢が撃たれて息絶えた瞬間に、吉田さんが誕生したものと

仮定している。仮に生まれ変わりが、そのように切れ目なく生命が受け継がれるものとしても、羅漢と吉田さんの間に別の生き物の段階があつたということはないだろうか。しかし、この点に関しては、大きなずれはないと確信している。僕はすでに、このテーマにおける元さんなるキーマンが現実存在していたことを確認している。元さんは亡くなつているが、現存する知人が存命中であることもわかつて

いるし、その人にも僕自身が話を聞いているのである。山口常蔵さんである。

もう一つの仮定は、羅漢が射殺されたとき七、八才であつたとしたことである。これはもつと若いときに撃たれた可能性も大いにある。しかし、その場合のずれはたいして大きくはない。せいぜい三、四年であろう。

僕は吉田さんに、急いで計画を立てて相談に行く

ことを約束した。吉田さんは、出来るだけ僕の計画がスムーズに実行できるように、船の模型作りを精力的にやって時間を生み出すようにすると約束してくれた。

僕は、その日吉田さんを家に送ってから、帰宅すると明け方までかかって『羅漢を辿る計画』を練った。吉田さんは、一週間くらいは船作りやそれ以外の予定があると言っていたので、僕は何度も計画に

手を加えながら、一週間が過ぎるのをじりじりしながら待った。そして、ちようど一週間後に、僕は吉田さんを訪ねたのであつた。

吉田さんはこの一週間とても忙しかつたそうだが、それも僕との計画が楽しみで、仕事を片付けるのはまったく苦にならなかつたといつてくれた。僕はそれを聞いて安心した。ひそかに、吉田さんの気が変

わつたりしないかを心配していたからである。

僕は、二万五千分の一の地図を広げながら、計画を説明し始めた。吉田さんも五万分の一図を買い求めて準備していたので、僕は感激した。二種類の縮尺の地図は、行動計画を立てるのに両方とも大変役に立った。どちらの地図にも鉛筆の印がどんだん書きこまれていった。

計画は、大部分は羅漢が行動した範囲を推測して、

その地域を歩き回ることである。それは、あの岩に行つた日に吉田さんが示した行動が基準になつてゐる。つまり、羅漢の行動した場所に行き当たると、吉田さんはきつと前世の記憶を蘇らせるはずだと言ふことである。だから、羅漢が行動した場所に行き当たらないかぎり、何もわからないということにもなる。ツキノワグマの一般的な行動範囲が十キロ四方以内くらいとしても、山中をくまなく歩き回るの

は容易なことではない。しかも、人間がよく歩く登山道や山仕事の人たちの道には、ツキノワグマはあまり近づかない。道なき道、あるいは先日這うようにして進んだようなまさにけもの道を歩き回らなくてはならないのである。しかし、この計画には、それだけの苦労をする価値があると僕は確信していた。もちろん、山口常蔵さんに会って、さらに詳しい話を聞くことも計画に入れた。また、もう一度役場の

あの丸刈りの人にも会うことにした。それだけでなく、僕はツキノワグマに関する本や資料を可能なかぎり調べた。

それから三月の間に、吉田さんと僕は十二回にわたって山の中を歩き回った。それはいずれも日帰りであったが、早朝から夕方森の中が薄暗くなるまで歩き回った。本で読んだところによると、この地域

では人里に熊が出没することは珍しくなく、裏庭の柿の木で悠々とカキを腹いっぱい詰め込むといった話が珍しくないように書いてあつたので、山と里の境界付近も注意して歩いたが、多くの場所に電気柵が設置されていて、森と人里とが遮断されているのであつた。歩いた距離の合計は、地図上で測ると百五十キロ以上になり、歩き回つた範囲は百平方キロを超えた。

しかし、元さんの家が見えるあの岩に出るときの
ような劇的な吉田さんの行動はほとんど、いやまっ
たくと言うべきであろうか、なかったのだ。吉田さ
ん自身、そのような結果にあせりを感じたのか、獣
道のような藪のトンネルを見つけると、鼻を近づけ
たりしていたが、それは人間吉田さんの意図的な行
動でしかなかった。何度も熊棚を見つけたが、そん
なときも吉田さんは何の記憶も呼び覚まされないよ

うであつた。この三月にわたる現地調査の間吉田さんは一貫して覚めたひとりの「人間」であつたと言うわけである。

大きな労力を費やしただけに、僕たちががっかりしたことは確かだが、これで僕の計画が終わってしまつたわけではなかつた。僕は、吉田さんが羅漢の記憶を呼び覚まさなかつたのは、意識的に歩き回つたからだと考えている。このことは初めから予想し

なかつたわけではない。ただ、あの岩の出来事がありにも劇的だったので、つい性急に大きな期待を
してしまつただけである。

僕たちは山口常蔵さんに会うことにした。そのときのために山を歩き回つたことが重要であつた。歩き回つたところは二万五千分図と五万分図に詳しく書き込んである。熊棚を見つけた場所、熊の皮剥ぎ

の跡、熊の糞を見つけた場所、獣道がはつきりしていた場所なども印をつけてある。これを見せながら常蔵さんの話を聞けば、先日僕だけが話を聞いたときよりもずっと具体的になると考えた。

この前と同じように、常蔵さんは日当たりのいい縁側で話に応じてくれた。僕は吉田さんを、どう言っただけで常蔵さんに紹介するか迷った。いきなり前世で羅漢だったといっても、信用される可能性はない。

かといつて特別な妙案もなかったもので、とりあえず熊のことに興味のある友達であるとしておいた。常蔵さんは吉田さんには特に関心も示さない様子で、もっぱら二度目になる僕に向かつて話をするのであった。常蔵さんの話は、猟師をしていたころ、どのあたりで熊を仕留めたかという話が中心であった。僕たちが持っていた地図で、その話の場所を特定したかったが、常蔵さんはあまりそのことに熱心で

なかつた。

僕があまり話しの内容と地図上の位置とのこと
こだわると面倒がるのであつた。それにほとんど地
名も何もない白地図に見慣れていないせいもあつて
か、猟師として実際に歩きなれた山地と、地図上の
位置とを照合することが出来ないようであつた。し
たがつて、僕は自分の頭の中で、常蔵さんの話に出
てくる場所を予測しながら聞くことにした。

吉田さんは、終始黙って聞いていたが、途中一度だけ、僕だけが気づく程度ではあったが、常蔵さんの話に反応して、顔色が変わったのに気がついた。それは、常蔵さんが犬とともに、あるツキノワグマを追い詰めたとき、一匹の犬が不用意に近づきすぎて熊に頭を噛み砕かれた話をしているときであった。もちろん僕は、吉田さんから聞いた話と酷似していることに気づいていたので、吉田さんをそれとなく

観察していたのである。常蔵さんが、

「……そいつがわしのかわいいシロを食い殺しやがった……」

と憎憎しげに言ったとき、吉田さんは奥歯をグイツとかみ締めて、わずかに顔を高潮させた。そして常蔵さんが、

「……わしは逃げていくそいつの後ろから、一発食らわしてやったのじゃが、耳を掠めただけで、取

り逃がしてしまったのさ。大きな凶体のくせに実にすばしこいやつじやった・・・」

と言ったときには、吉田さんは常蔵さんを睨みつけているように思った。しかし、僕がはつとして改めて吉田さんを見ると、もう普段の穏やかな表情に戻っていた。僕はそのとき常蔵さんが耳を撃った熊が羅漢であることは間違いないと思ったが、何食わぬ調子で、

「そのとき取り逃がしたのは、羅漢じゃなかったのですか？」

と訊いてみた。

「そうかもしれん。やたらにでつかい熊が、目の前でたけり狂っているのに、そいつが羅漢かどうかなんて考えている余裕はないさ。鼻の脇に仲間と争つて作った傷が目立ってたが、どえらく獰猛そうじゃった。あんな強そうなやつを見たのは初めてじゃつ

たよ。わしのシロは、完全に頭を砕かれて顔のあたりがぼろ布みたいにされておつた」

常蔵さんは、遠い昔の情景を思い出すように遠くを眺めた。

常蔵さんは羅漢のことを、話としては知っていたが、実際に自分が羅漢に接したことはないらしく、僕たちは犬を噛み殺された話以外は、具体的に羅漢に関する手がかりを得ることは出来なかつた。残念

だったのは、その犬を噛み殺された現場が何処なのか、どうしても常蔵さんが思い出してくれずに、わからずじまいになったことであつた。当時常蔵さんは、西中国山地一帯の広い範囲で猟をしており、それがこの地域かどうかさえ特定できなかつたのである。でも、参考になることはたくさんあつた。

僕たちは二時間ほども話を聞いてから常蔵さんのところを辞した。

僕たちは、帰りに例の岩を見上げる場所に行つてみることにした。僕は途中で昔元さんが住んでいたという家の近くで一度車を止めて、吉田さんとそこいらを歩いてみた。

元さんが住んでいたという家は、今ではすつかり古くなつた農家で、街中のような造りの家も含めて、古い形の家でも何らかの手を加えた跡がある家が多い中で、この家だけは古さで目立っていた。僕たち

は、覗き込むようにしながら、その家の前を通つた。人が住んでいるのか居ないのか、窓も戸も全部閉まっています、縁側のガラス戸のカーテンもぴたりと閉められている。洗濯物もないところを見ると、留守なのかもしれない。荒れた様子がないところを見ると、空き家ではないらしい。

あまりじろじろのぞくのもと思つて、僕が通り過ぎようとする、吉田さんがついてきていない。見

ると、吉田さんは、その家の敷地に入っていくところであつた。母屋に付属して、農機具を置いたり、農作業をしたりする納屋があるが、吉田さんはそこに近づいて中を覗いている。そういうところには、普通耕運機や農機具とか、作物が取り込んであつたりするのだが、ここには何もなかつた。吉田さんは、遠慮がちに覗き込んでいたが、ついに奥の方に入つていってしまった。僕はあわててあとを追つた。も

ちろん、吉田さんの記憶が呼び覚まされていると思
ったからである。吉田さんは、家の裏手に回ってい
た。そこには二メートル四方ほどもある鉄の檻が付
いた箱がある。中は空できれいにしてあるようであ
るが、吉田さんはその前にしゃがんで、鉄の檻を両
手でつかみじつとしている。僕は少し離れたところ
から、その様子を見ていた。吉田さんは立ち上がる
と、その箱の周りを見て回っていたが、あろうこと

か、その箱に向かつて放尿し始めた。吉田さんは僕が後ろから見ていることには気づいていないらしい。それにしても、そんなことをする人ではない。きつといま吉田さんは、羅漢になつてゐるのだ。僕は足音を忍ばせて、建物の影に移動した。そしてそこからじつと吉田さんの様子を伺つた。吉田さんは放尿を済ませると、ふたたび箱の周りを一周し、檻に顔をつけるようにして箱の中を見ていたが、やがて箱

から離れて、こちらに歩いてきた。僕はいそいで身を隠してから、いかにも吉田さんを探しに来たような風を装った。近づいてきた吉田さんは、いつもの表情である。箱の周りで吉田さんがどのような表情をしていたのか、残念ながらはつきり見て取る事が出来なかった。僕は何食わぬ顔で、

「吉田さん。急に見えなくなるからどうしたのかと思いましたよ。いったいどうしたのですか？」

と訊いた。吉田さんは、明らかにどぎまぎしたが、それを僕に悟られまいとして平静を装うと、

「いやあ、すみません。ちよつと用足しを・・・」
と、いって頭をかいた。下手なごまかしである。たしかに用足しには違ひなかつたかもしれないが、わざわざ人家の敷地に入らなくても、そのような場所はここならいくらでもある。僕は、このところずっと一緒に吉田さんが前世に出会つた場所を探っている

のに、なぜかかわりのありそうなことを隠そうとするのか理解に苦しんだ。そして、吉田さんは僕にも知られたくないような重大な羅漢に関する秘密を思い出したのではないかと思った。それがなんであるかは、このときはまだ僕にはまったく見当が付かなかった。

僕たちは、元さんが住んでいたという家を見たあと、車で例の岩の見えるところに行った。岩の上か

らは、川と道そして先ほどの家まで見渡せるのだが、下から見上げる岩は、わずかに白い点のように見えているだけである。しかし、先ほど常蔵さんから聞いたところによると、昔はあの岩の周りに大きな木はなく、現在よりもずっと岩はよく見えていたそうである。だから、岩の上に現れて遠吠えする羅漢が目撃されたのである。僕は当時の様子を想像しながら、吉田さんと二人でしばらく眺めていた。

それからしばらく羅漢をたどる作業はなかった。吉田さんが模型作りで忙しくなったのと、僕も親戚のことで九州に行ったりしたためであつた。

〔八〕

一月ほどしたころ、吉田さんから分厚い封書の手紙が届いた。便箋十二、三枚にもわたって、山を歩

き回ったときのこと書かれている。一緒に歩いて
いたときには、吉田さんの行動に特別なことがなく、
唯一の手がかりは常蔵さんの犬を噛み殺した話のと
きのかすかな表情の変化と、元さんの住んでいた家
の裏での吉田さんの不思議な行動だけであつた。し
かし、手紙には、山の中でくらくらするほどたくさ
んの羅漢体験をしたとあつた。

『私は・・・』

話すときには、自分のことを俺という吉田さんだが、手紙では「私」になっていた。

『私は、ご一緒に山の中を歩きながら、随所で衝撃的な体験をしました。それらがあまりにも生々しいので、あなたに気づかれないようにするのに苦労したので。羅漢のことを調べるのが目的で苦労して

いるのに、その手がかりを隠してしまふことに大変後ろめたさを感じましたが、あの時はどうしてもそうなつてしまつたのです。しかし、こうして時間がたつてくると、気持ちも落ち着いてきたので、そのときのことを書くことにしたのです。

あなたと歩いた森は、まさに私の、いや羅漢の暮らした森だったので。あすこには、羅漢が冬籠りした洞穴がありました。自分が冬籠りした場所だと

わかつたのは一箇所ですが、それは何度も使つたものです。ほかにもあつたのかどうかはわかりません。それから、常蔵さんが話していた、犬を噛み殺した場所もありました。私は、一面雪の中に追い出されて何匹もの犬に吠え立てられているところを思い出しました。その中のしつこい一匹の頭を噛み砕いたときの口の中に広がった感触もはっきりと思い出しました。これについては、第一運送時代にお話した

ことがあつたと思います。そのときに、運良く後ろから耳を撃ち抜かれただけで、殺されずに逃げるこ
とが出来たのです。

私が、あなたに気づかれまいとしたのは、次に書くことがあつたからなのです。

私は、いや羅漢は、あの山であるメスに出会いま
した。結局私はそのメスと何度か交尾し、メスは私
の子を生みます。しかし、初めてそのメスと出会っ

たとき、彼女はオスの子グマを連れていました。私は、いや羅漢は、メスにまとわり付くその子グマが邪魔でたまりませんでした。いらいらして噛み殺してしまつたのです。メスグマは、噛み殺した子グマをその場で食べてしまふ私を、黙つてみていました。そのあとわれわれは交尾したのです。彼女とはその年かぎり出会わなかつたと思います。

私は、このようなおぞましいことをしたことを

生々しく思い出していたのです。とてもあなたに説明できることではないと感じたのです。しかし、よく考えてみると、それは私ではないのです。人間であれば猟奇的な犯罪ですが、メスと交尾するオスグマとしては、よくあることなのです。私は、そのころメスをめぐって、他のオスとしばしば激しく争いました。私は、子グマのころから栄養がよかつたためか、体が大きく負けることはありませんでした。

しかし、鼻面は相当傷つけられました。だからひどい人相になつていたと思います。

ご一緒に歩いたときには、電気柵が出来ていて、森からそのまま里に出られませんでした。羅漢だつたころにはそのようなものはなかつたので、私はずいぶん人間の家に近づいて、柿や栗を食べたものです。人間の里は私にとっては危険な場所ですが、鉄砲を持っていない人間はおそれる必要がないこと

を知っていました。特に人間の女や子供は危険では
ありませんでした。

私は、山奥に連れて行かれて放されました。しば
らくは、私は放されたあたりで暮らしましたが、食
べ物を求めて歩き回るうちに、人里に近づくように
なつたのです。人里には果物の木がたくさんあるの
で、食べ物を探す苦労がありませんでした。私は、
朝早くか夕方暗くなつてから、そのような里の木の

実を食べに出かけたのでした。人間たちは私に気づいても、遠くから指差しながら見ているだけで、攻撃してきませんでした。そのようにして人里に近づいているうちに、あの岩のところに出たのでした。岩の上に出ると、風向きの加減でしようか、私が慣れ親しんだ匂いがしたのです。どの家かというようなことはわかりませんが、方角ははっきりとわかりました。このたびあなたと歩いてわかったことによ

ると、私が飼われていた元さんの家からの匂いだっ
たのです。私は懐かしさで、毎日あの岩に行きまし
た。月の明るいときなど、私は懐かしさで泣きまし
た。

ある朝まだ薄暗いときに岩に行つたのです。私は
岩の上に座り込んで、元さんの家の匂いを楽しんで
いました。そこでは、それまで一度も生き物に出会
わなかつたので、私は油断していました。風下から

いつの間にか近づいた猟師が私を撃つたのです。私は前足に熱い痛みを感じました。振り向いた先に鉄砲を構えた人間がいます。私は岩から急斜面に飛び降りて逃げました。前足が痛くて思うように走れませんでした。力の限り走りました。茂みの斜面を横切るように走ったので、猟師からは見えなかったでしょう。後ろから銃声は放たれませんでした。どれくらい走ったでしょうか。私は大きな木の窪み

のところでは休むことにしました。そこは私がいつも暮らしている場所ではありませんでした。そのため不安な気持ちでしたが、それ以上続けて走ることも歩くこともできないくらい足の傷が痛んでいました。私は傷の血を舐めながらじつと痛みを堪えてうずくまっています。前足の先の方がブラブラになっっていました。もう一歩も歩けないと思いました。

気を失っていたのか眠っていたのかわかりません

が、ハツと気がつくとも人間と鉄砲の匂いがします。正面すぐ近くの木の下から人間が鉄砲を構えています。私は足が痛いことも忘れて、反対側に飛び上がるようにして走ろうとしましたが、前足が利かず転んでしまいました。同時にガーンと音がして何もわからなくなつたのです。何もわからないと云うより、正確に言うと、真っ白い中を落ちていくような感じでした。痛いとか、怖いとか言う感覚は何もなかつ

たと思います。羅漢はこのとき撃たれて死んだのだ
と思います。そのあと私がいつどのよう人間とし
て生まれてきたのかは、自分ではわかりません。ご
く小さな子供のころ母親の後について回ったことを
断片的に記憶しているだけです。人間として暮らし
たときのさまざまな出来事を思い出せるのは、ずつ
と後になって、そう四、五才になってからでしょう
か。』

(未完)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、

入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

むかし俺がクマだったころ

2022年11月12日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：www.photo-ac.com

・タイトル：十二湖の森林

作者：shikemaさん

写真のID：384893

・タイトル：ん？

作者：みんな大好き動物園さん

写真のID：24234675

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
